

令和8年4月30日  
農推第1353号

## 病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
発生に注意【なす(施設栽培):うどんこ病、アザミウマ類、ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)、もも:せん孔細菌病】	1~2
病害虫の発生予報(5月)	3
野菜【たまねぎ、ねぎ、野菜類】	3~6
果樹【ぶどう、もも、みかん】	7~8
その他注意すべき病害虫【水稻:スクミリンゴガイ、バラ科果樹:クビアカツヤカミキリ】	9

## 発生に注意(5月)①

## なす(施設栽培):うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

## 特徴

- ◆ チツソ過多で気温が25~28℃、湿度が50~80%で日照不足が続くと発生する。

## 防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたらパンチョTF顆粒水和剤、パルミノ等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## なす(施設栽培):アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

## 特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ほでの発生が多くなる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマによって葉が加害されると、葉脈に沿って不規則な白斑が生じる。また、ミカンキイロアザミウマによっては、葉脈間に白斑が生じる。

## 防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 発生が見られたら、アフーム乳剤、モベントフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

次回の情報は5月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

## 発生に注意(5月)②

## ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑



ネギアザミウマ成虫

## 特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

## 防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤(アザミウマ類)、ディアナSC(アザミウマ類)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## もも:せん孔細菌病



春型枝病斑



葉の病斑

## 特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し、春型枝病斑(スプリングキャンカー)を生じる。
- ◆ 発病した葉や枝から新梢に二次感染すると夏型枝病斑(サマーキャンカー)を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

## 防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、チオノックフロアブル、デランフロアブルなどを散布する。
- ◆ 春型枝病斑や夏型枝病斑を見つけたら、切り取ってほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

## 病害虫の発生予報(5月)

作物名	病害虫名	予想発生量(5月)
なす(施設栽培)	すすかび病	平年並
	灰色かび病	平年並
	うどんこ病	やや多い
	アザミウマ類	やや多い
たまねぎ	べと病	平年並
	ネギアザミウマ(えそ条斑病)	平年並
ねぎ	さび病	やや少ない～平年並
	べと病	平年並
	ネギハモグリバエ	平年並
	ネギアザミウマ(えそ条斑病)	やや多い
野菜類	アブラムシ類	平年並
	コナジラミ類	平年並～やや多い
ぶどう	灰色かび病	平年並～やや多い
	チャノキイロアザミウマ	平年並
もも	せん孔細菌病	やや多い
	シンクイムシ類	平年並
みかん	ミカンハダニ	やや少ない
	ミカンハモグリガ	平年並

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※ねぎは令和5年度より調査開始のため、過去2年のデータを平年値としています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

## 野菜

## たまねぎ

## べと病



二次感染株の症状

## 特徴

- ◆ 好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、予防散布が重要である。
- ◆ 多発する年には4月上旬ごろより発生が見られるため注意する。

## 防除のポイント

- ◆ 発病株は、次年度の感染源となるため、ほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン水和剤/ペンコゼブ水和剤、ランマンフロアブル等を、発生を認めたら、プロポーズ顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

## ネギアザミウマ(えそ条斑病)



ネギアザミウマ成虫

## 特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

## 防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤(鱗茎類 アザミウマ類)、ディアナSC(アザミウマ類)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



えそ条斑病※

## ねぎ

## さび病



葉の病斑

## 特徴

- ◆ 葉面にオレンジ色のやや隆起した小斑点が多数できる。
- ◆ 多発すると被害葉が枯死する。
- ◆ 気温が22℃ぐらいで雨の多いときに発生が多い。
- ◆ 肥料切れした畑で発生が多い。

## 防除のポイント

- ◆ 菌は被害植物上で越冬するので、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン水和剤/ペンコゼブ水和剤、カーニバル水和剤を、発生を認めたらメジャーフロアブル、カナメフロアブル等を散布する。

## べと病



べと病の症状

## 特徴

- ◆ ベと病は好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、予防散布が重要である。

## 防除のポイント

- ◆ 発病株は、次年度の感染源となるため、ほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン水和剤/ペンコゼブ水和剤、ダコニール1000等を、発生を認めたら、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

## ねぎ

## ネギハモグリバエ



葉の食害痕(新系統)

## 特徴

- ◆ 葉の内部を幼虫が食い進み、その痕が細長く白い筋になる。
- ◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

## 防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ベネビアOD、リーフガード顆粒水和剤等により、発生初期の防除を徹底する。



▲新系統について詳しくはこちら

## 野菜類

## アブラムシ類



ワタアブラムシ※

## 特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

## 防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマトなど)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## コナジラミ類



タバココナジラミ※



コナジラミ類成虫\*

## 特徴

- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ トマトやミニトマトでは、タバココナジラミの吸汁による果実の着色不良、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)やToCV(トマト退緑ウイルス)の伝搬等の被害を引き起こす。
- ◆ きゅうりでは、タバココナジラミがCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)の伝搬等の被害を引き起こす。

## 防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底する。
- ◆ ウイルス病の感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ バストガード水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、アグリメック(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。



トマト黄化葉巻病発症株

## 果樹

## ぶどう

## 灰色かび病



花がらでの症状

## 特徴

- ◆ 多湿条件で発生が多くなる。
- ◆ 胞子が雨や風によって飛散し、傷口等から感染する。

## 防除のポイント

- ◆ 適切に換気を行い、湿度を下げるようにする。
- ◆ 第1回ジベレリン処理から結実始めの間にビニルでマルチングをする。
- ◆ 花がらが発生源となることが多いので、開花後に花がらを取り除く。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ゲッター水和剤などを散布する。

# 果樹

## チャノキイロアザミウマ



被害果\*

### 特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

### 防除のポイント

- ◆ モスピラン顆粒水溶剤、コルト顆粒水和剤などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

# もも

## シンクイムシ類



被害果

### 特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

### 防除のポイント

- ◆ 被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 産卵期から幼虫加害期(5月上旬～7月下旬)にモスピラン顆粒水溶剤、アディオン乳剤などを散布する。

# みかん

## ミカンハダニ



被害葉

### 特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

### 防除のポイント

- ◆ 6月中～下旬に、ハーベストオイル、スプレーオイルなどのマシン油剤を散布する。
- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル、マイトコーネフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

## ミカンハモグリガ



被害葉(葉裏)

## 特徴

- ◆ 夏・秋期に発生が多く、幼木に被害が多い。
- ◆ 発生が多いと、かいよう病を誘発する。

## 防除のポイント

- ◆ 新梢、新葉を中心に散布すると効果的である。
- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤、ダントツ水溶剤などを散布する。
- ◆ アディオン乳剤は、散布後にハダニ類が発生しやすいので注意する。

## その他 注意すべき病害虫

## 水稲

## スクミリングガイ(ジャンボタニシ)



成虫



卵塊

## 特徴

- ◆ 成員の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 主に田植え直後(約20日後まで)の苗が食害され、欠株になる。成長した稲(5葉期以降)は食害されにくい。
- ◆ 卵は濃いピンク色で、稲の茎や葉の付け根、あぜ板、用水路の壁面などに産卵する。
- ◆ 寿命は2～3年で、多くの個体は2年目の産卵期を終えると寿命を迎える。
- ◆ 低温耐性は強くないが、府内では越冬が可能。

## 防除のポイント

- ◆ 加害時期(田植直後から約20日後まで)にスクミノン、スクミンバイト3、ジャンボたにしくん等の散布や、浅水管理により重点的に防除する。  
注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間たん水状態にし、かけ流しや落水はしない。
- ◆ 加害時期以降は、卵塊を水中にかき落とし(濃いピンク色の卵は水中で窒息死する)、成員は捕殺して、貝の密度を低くする。
- ◆ ふ化直前の白っぽい卵は水中でもふ化するため、水中に落とさず除去する。
- ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(目合い5mm以下)を設置する。

「スクミリングガイ(ジャンボタニシ)生態と防除」(令和7年5月発行)もご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/r7sukumiringogai-osaka.pdf>

## 果樹

## バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

## クビアカツヤカミキリ



フラス

成虫



幼虫

## 防除のポイント

- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で、中華麺～うどん状の太さに固まる)を排出する。6～8月に成虫が羽化する。
- ◆ フラスの発生を見逃さないように、ほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ 成虫が発生する前の5月下旬までに4mm目合いネットを2重、もしくは0.4mm目合いネットを1重に樹幹に巻き付け、羽化して樹から脱出した成虫を閉じ込め、他の樹への分散を防ぐ。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」もご参照ください。  
[https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka\\_osaka.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka_osaka.pdf)